飛び出せ 学校

この新聞は、玖珠町八幡小学校の６年生（藤本貴裕教諭＝９人）が、大分合同新聞の記者と一緒に作りました。

大分合同小学生新聞

発行者
玖珠町
八幡小学校
6年生

私たちが通う玖珠町八幡小学校は、全校児童34人が学年関係なく元気に遊ぶことができます。毎年、多くのゲストティーチャーが来てくれ、米作りや文化、歴史などを教えてくれて楽しいです。今年は、私たち6年生が県立埋蔵文化財センターの「子ども学芸員」になり、八幡地区にはどのような「もののふ」の歴史があったのか、ゲストティーチャーの方に聞いたり、学校の図書館で本を読んだりして調べました。一生懸命書いたので、ぜひ読んでください。

皆さんは「もののふ」とは何か知っていますか。もののふとは、平安時代の終わりから江戸時代までいた戦陣に立つ武士のことです。元々は貴族のボディーガードでした。

私たちは、八幡地区のもののふについて詳しく知ろうと、玖珠町教育委員会の野口典良さん(45)にお話を聞いたり、本を読んだりして調べました。

八幡のもののふの始まりは、平安時代に京都から玖珠にやって来た清原正高だといわれています。そして、清原正通、長野助通、古後通房と続く清原氏の子孫たちが地名を名字にしていきました。

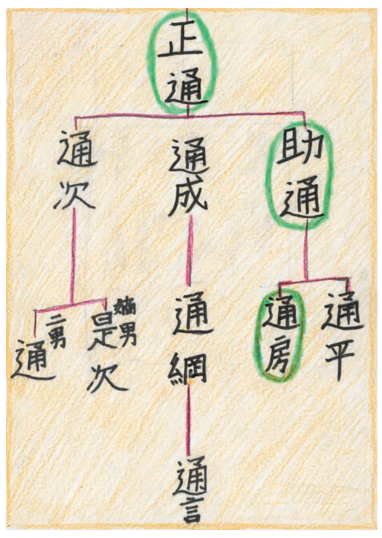
古後通房の5人の子どもたちは、「平井」「志津里」「原口」「綾垣」「古後」と八幡の地名を名字にして、その地区に住み、玖珠郡衆と呼ばれる武士団の一員として活躍しました。

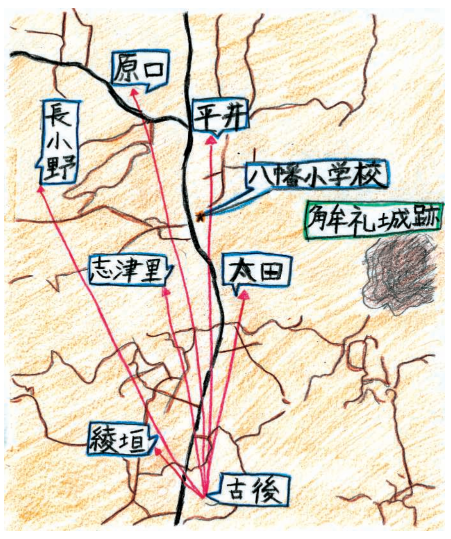
もののふたちは、普段は村に住んでいました。そして、村のリーダーとして、村人たちと助け合いながら生活をしていました。戦のときは、山の上につくった城へ村人たちを引き連れていき、村人を守るために戦いました。

八幡にも角牟礼城と古後城という城がありました。八幡のもののふが参加した戦いで最も古い記録は1336年の玖珠城（伐株山城）の戦いです。南朝側の玖珠城に綾垣氏、古後氏らの北朝側の約5万人が攻めていき、8カ月間も続いたそうです。

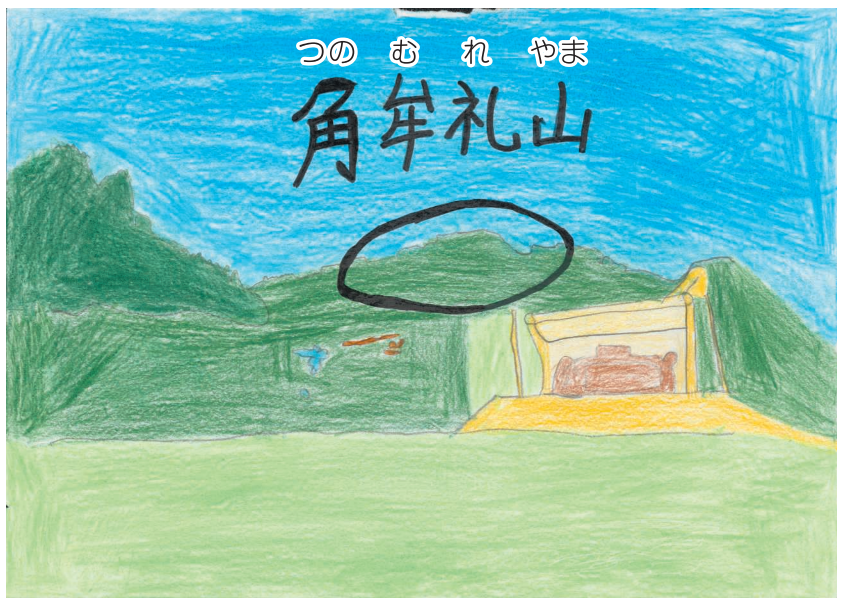
次に調べた戦いは1587（天正15）年の豊薩合戦です。角牟礼城に島津軍6千人が攻めてきて、八幡からは古後氏、太田氏らが参加し角牟礼城に立てこもって戦いました。この戦では八幡のもののふたちも鉄砲を使っていたそうです。

私たちは八幡のもののふについて調べ、八幡にもすごい城や歴史があることが分かりました。それらを多くの人に知ってもらいたいと思いました。



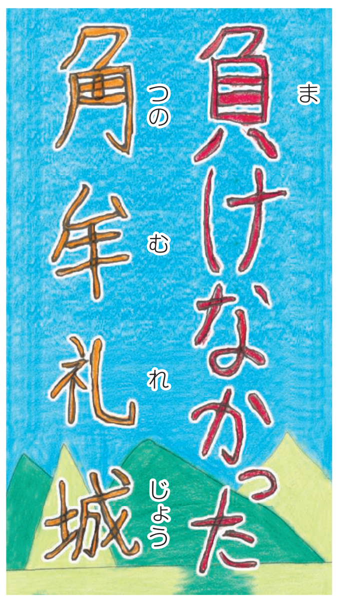


㊤古後正通からの家系図
㊦古後通房の子どもたちが八幡地区に広がった


つのむれやま
角牟礼山

三島公園から見た角牟礼城跡

野口典良さん


負けなかった
角牟礼城

角牟礼城は、平安時代の1155年に源為朝がつくったとされています。島津軍が攻めてきた豊薩合戦では、豊後国の城の多くが落城しましたが、角牟礼城は落城しなかったそうです。そのため角牟礼城は「難攻不落の城」と呼ばれています。普段は城が壊れたり、敵に奪われたりしないようにと、必要最低限の人がいたと思われます。

角牟礼城は、平たんな山の頂上を急な崖が取り囲む地形を利用してつくられた山城です。南側以外は崖に囲まれて登れないようになっていました。崖の高さは、だいたい10～13メートルあります。頂上の平地には城の本丸があったそうです。

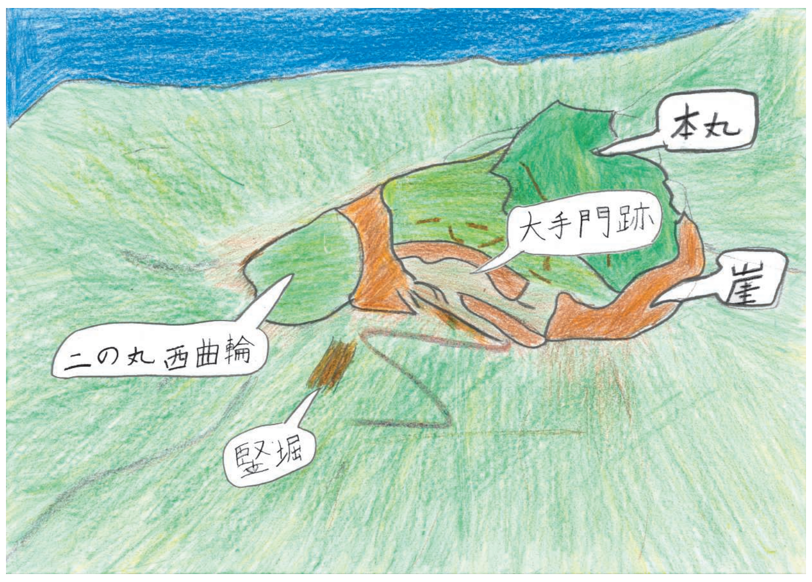
私たちは、野口さんに案内してもらいながら、実際に角牟礼城に登ってみて、城のつくりを見学しました。

竪堀や石垣、切岸など、城を守るためのつくりがたくさんありました。竪堀は、今はなだらかな坂になっていますが、当時は深さが1～2メートルあり、縦1列でしか登れないようになっていました。上から大きな岩を転がして攻撃していたそうです。

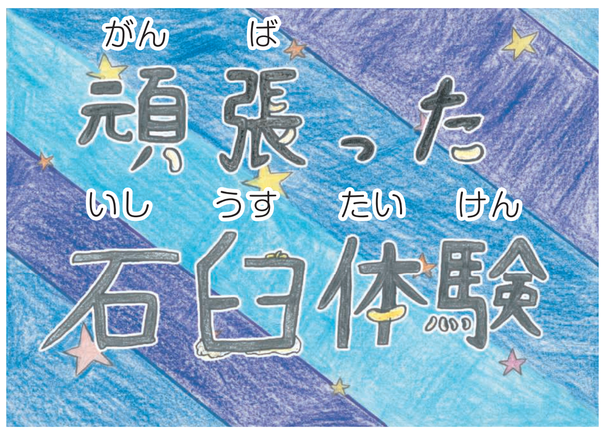
また、本丸への道は狭く何度も折り返しがありました。こちらも1列でしか登れないようになっており、上から見た時に敵の数が分かりやすいということです。

急な坂道を登っていくと大手門があり、そこから見張ったり指示を出したりしながら攻撃していただろうと、当時のことを想像することもできました。

角牟礼城の最大の石垣は、長さ100メートル、高さ7メートルもあります。この角牟礼城を重さ10キロの装備を身に付けて登っていくと考えたら、とても大変だと思いました。



角牟礼城のつくり



豊薩合戦で、八幡のもののふが立てこもっていた角牟礼城の「二の丸西曲輪」の辺りから、石臼が見つかったそうです。石臼は食べ物をひいて粉にする道具ですが、城で見つかったものは、火薬作りに使われていたともいわれています。

私たちは、この石臼をひいてみることで、もっと当時の人たちの気持ちが分かるのではないかと思い、石臼できな粉を作ってみることにしました。

石臼体験は、八幡に住んでいる芝原旭さん(83)に協力してもらいました。芝原さんから大豆について説明がありました。大豆は黒大豆、青大豆、白大豆の大きく3種類があります。

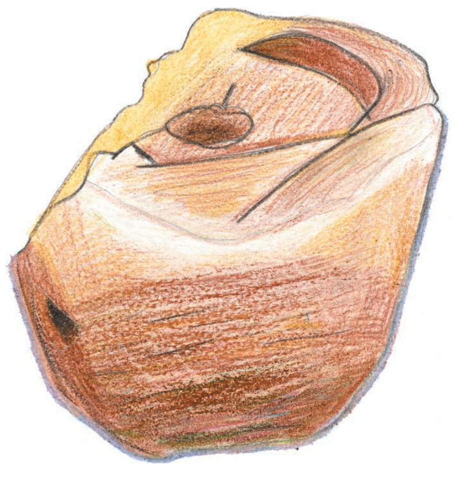
普段、よく見かけるのは白大豆ですが、今回は青大豆を使いました。青大豆は硬いけどうま味があるそうです。

そして、石臼で大豆をひいていきます。1回目は、重かったので力いっぱい回しました。大豆が石臼の間に入っていくと少し軽くなりました。大きな粒がたくさん出てきましたが、匂いは大豆をいったような香ばしい香りで、食べてみると粒が硬く、苦味を強く感じました。

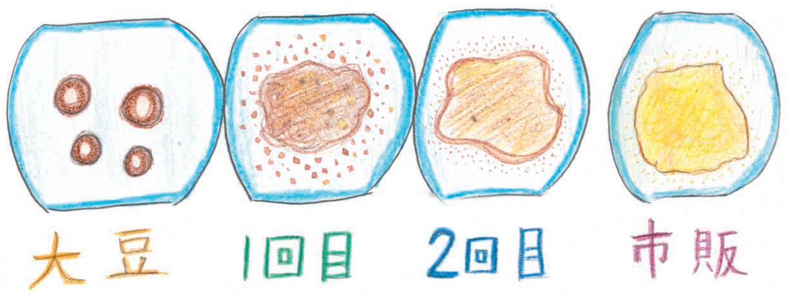
2回目は、ひくのにも慣れ、スムーズに回せるようになりました。出てきたきな粉を触ってみると、さらさらしていました。きな粉の匂いがして甘味も感じ、市販のものに近い見た目と味になっていました。

芝原さんは「昔は石臼が少なかったので、近くの人が集まり、みんなで協力してひいていたと思います」と話していました。私たちは「昔の村でも、もののふをリーダーにみんなで協力して石臼をひいていたのかな」と思いました。

芝原旭さん



角牟礼城跡から出てきた石臼



きな粉ができるまでの様子

私たちが作りました

新聞ができるまで

玖珠町八幡小

歴史学び地域の見え方変化

豊かな自然に囲まれた玖珠町太田の八幡小学校。今年、県立埋蔵文化財センターの子ども学芸員に選ばれた６年生９人は、八幡地区にいた武士「もののふ」について調べた。新聞作りを通じて、地域の歴史に関する知識を深めた。

６月、町教委の野口典良さん(45)を講師に招き、武士や戦などについて学んだ。授業で習っていない言葉も多く、初めは苦戦した様子の児童ら。図書館で調べることで、次第に情報が整理できた。

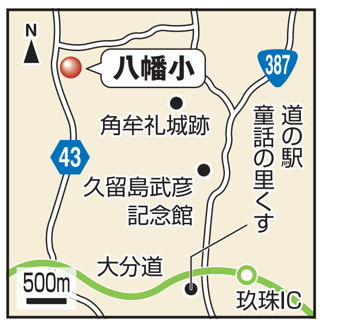
夏の校外学習では野口さんに案内してもらい、町内の角牟礼城跡を見学。みんな一度は訪れた場所だったが、学習したことで見え方が変わり、興味関心を持って散策を楽しんだ。

角牟礼城で石臼が見つかったことを知り、９月は実際に大豆ひきに挑戦。石臼を持っている地元農家の芝原旭さん(83)の指導を受けながら、昔の人たちの生活に思いをはせた。

新聞を完成させた子どもたちは、大きな達成感を得た。きちんと相手の話を聞き、取材する技術も身に付けた。担任の藤本貴裕教諭(35)は「修学旅行でも、記者さながらにメモを取っていた。成長を感じることができた」と喜んだ。

大分合同新聞社西部総局の姫野直也記者(31)が取材の仕方をアドバイス。見出しの付け方やレイアウトの基本は、同ニュース編集部の広石修一記者(44)が指導した。

㊧「5W1Hを忘れずに聞こう」西部総局の姫野直也記者から取材の仕方や記事の書き方を教わった（6月7日）㊥角牟礼城を守るためのつくりがたくさんあることを玖珠町教育委員会の野口典良さんから教えてもらった（7月12日）㊨ニュース編集部の広石修一記者の話を聞いて「より良い見出しにしよう」と話し合った（11月19日）



大分合同新聞 プレミアムオンライン Gate ゲート

動画

新聞づくりの様子をご覧いただけます

この企画は小学生（主に５、６年生）が、地域の魅力や課題を取材し、新聞にまとめる作業を通して古里を見詰め直すことを目的としています。問い合わせは大分合同新聞社地域連携室「飛び出せ学校」係へ。☎097・538・9729、Ｅメールnie@oita-press.co.jp